

オーディオ実験室収載

音源の比較試聴(40) —ラフマニノフのピアノ協奏曲 2 番—

1. 始めに

前報(39)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも述べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じマスター音源のアナログ盤と STAGE+からの配信を比較試聴します。
アナログ盤は下記を使用します。

ドイツ・グラモフォン MG2197

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

スヴィヤトスラフ・リヒテル (ピアノ)

スタニスラフ・ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー

LONDON SLA1033

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

ウラディーミル・アシュケナージ (ピアノ)

アンドレ・プレヴィン指揮ロンドン交響楽団

配信は STAGE+から上記と同一の曲を選択します。

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

ブルース・リウ (ピアノ)

ジャナンドレア・ノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

アレクシス・ワイゼンベルグ (ピアノ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

スヴィヤトスラフ・リヒテル (ピアノ)

スタニスラフ・ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase
STAGE+
ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase

3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レベルに対応したイコライザー特性で聴いていきます。
アナログのリヒテル／ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー盤は、腰の据わった重量感ある演奏です。
アシュケナージ／プレヴィン指揮ロンドン交響楽団盤は、先鋭的ですっきりとした切れの良い演奏で、上記のリヒテルとずいぶん違った印象です。
STAGE+のブルース・リウ／ノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団の演奏は、STAGE+を楽しむ(345)で報告しているとおり、メランコリックなロマンチズムの表情ブルース・リウが、じっくりとがっちりとした構成で演奏しています。
STAGE+のワイゼンベルグ／カラヤン指揮ベルリンフィルの演奏は、壮大でかっちりとした構成でありながら、耽美的なところもある演奏です。
STAGE+のリヒテル／ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニーの演奏は、上記のアナログ盤とマスターが同じのようで、演奏内容は上記のアナログ盤と同様ですが、音質的には若干重量感が薄れます。

4. まとめ

アナログ再生と STAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくっており、音源毎の収録環境や収録年代や演奏スタイルの違いがはっきり把握できます。

以上